

庭園礼讃

北近江お庭めぐり

自然からの賜を使って人為的な宇宙をつくる
そこに働く見立ての醍醐味
見せる観念、感じる造形
知って見ると、そうでないのとは大違い
お庭見のツボを押さえれば面白い
小さな空間の陰翳の妙



▲静寂に包まれる近江孤蓬庵の枯山水の庭

総説 庭園の歴史と北近江

―自然を如何に凝縮するか―

太田浩司 長浜城歴史博物館

一、日本庭園の特徴

日本庭園の最大の特徴は、自然の風景を模倣していることである。これを「市中の山居」と呼んだ。日本の庭園は都市に造られることが多いが、町中（市中）においても、庭を眺めれば山中に住んでいる（山居）ように思えるとの意味である。庭園には山があり、滝があ

り、川が流れ、その水が湖か海に模した池に流れる。池には鳥が浮かぶ。たとえ枯山水であっても発想は同じで、自然の景色が凝縮されているのである。

その特徴は、ヨーロッパの庭と対比することで、より一層明瞭となる。ヨーロッパの庭、特にフランス庭園は、直線と左右対称を基本とし、人工的な造形を形造っている。典型的

二、庭と宗教思想

ヨーロッパの庭と日本の庭を比較した場合、その文化圏の宗教感と密接に関連するように思えてならない。キリスト教が中心となる西

洋文化では、地上の万物は一人の神が造ったものとする。人間も自然も、同じく神が創造したものとするのである。

しかし、日本をはじめとする東洋文化では、自然そのものが神（仏）であると考える。山にも神があり、川にも神がいる。食物にも神が宿り、家にも神が住んでいるという。その神の数は無数に近く、「八百万の神」といわれる。仏様も加えれば、拜むべき神仏は実に多種多様だ。ここに、自然界そのものが神である、という思想が生まれてくる。

西洋の人々が、庭園を一種の人工的な造形としかみなさないのに対し、日本では庭に神や仏を見る。ここに、西洋の幾何学的な庭と日本の自然界に通じる庭の相違点が生まれる。したがって、日本人にとって庭は信仰の表現ともいえよう。前近代の日本は神仏混交であったが、庭についても神仏思想（鶴亀蓬菜）

と仏教思想、それに民間信仰が入り混じっている。

よく鶴亀・亀鳥という話を聞く。これは中国の古代思想で、海の中に仙人の住む島があり、そこには不老不死の薬があるとされる神仙蓬菜思想に基づいている。庭の中に須弥山を表現したり、三尊石を立てたりするのは、仏教思想である。須弥山は仏教でいう世界の中心にある山。三尊石は釈迦三尊や阿弥陀三尊を表現している。江戸時代の大名庭園には、民間信仰を基に陰陽石が取り入れられている所もある。

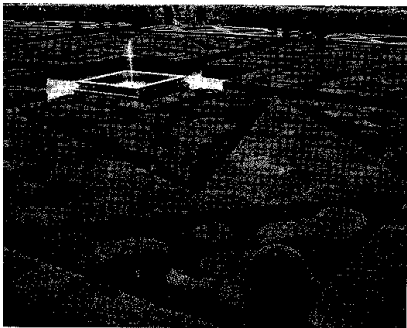
三、日本庭園の歴史

日本庭園の歴史は、飛鳥・奈良時代から始まる。最初は中国や朝鮮の庭の模倣だったが、純日本的な庭園が開花するのは、平安時代の寝殿造りにもなう庭園や、宇治平等院に象

徴される浄土式庭園からである。鎌倉時代になると、貴族や武士の住居が書院造りとなり、庭も屋敷の座敷から座ったままで鑑賞する庭園へと変化していく。平安時代の回遊式・舟遊式庭園から、鑑賞式庭園へと変化していくのである。庭の規模も、当然小さくなっていく。

室町時代には、禅宗が庭の歴史に大きな影響を与えた。夢窓国師はその象徴といえよう。ここで、須弥山思想や神仙蓬菜思想、または枯山水や三尊石の手法など、現代の日本庭園につながる重要な要素が、庭の中に取り入れられていった。

安土桃山時代には、茶道が庭に影響を及ぼす。その象徴が、門から茶室をつなぐ露地といわれる庭である。ここでは飛石が山道を表し、山を越えて茶室の友に会いに行く情景を表現した。限られた空間に自然景観を表す日本庭園の特徴が、もともと凝縮して展開する



▲幾何学的で左右対称の刈り込みが特徴的なフランス庭園 (Wikimedia Commons)



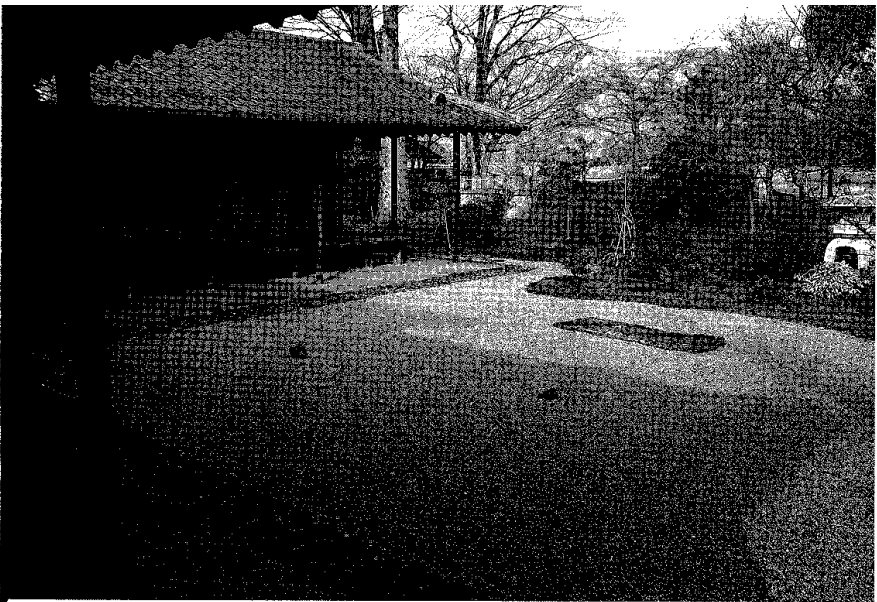
▲釈迦三尊や阿弥陀三尊を表現する三尊石は、仏教思想の表れ (赤田氏邸)



▲自然石を並べた飛石 (慈地院)

雨森芳洲庵庭園

芳洲さんの人柄を映して作庭



▲白い砂が敷き詰められた庭を広い濡れ縁から眺めると、京都のお寺に来たような感覚になる

雨森芳洲庵は、雨森出身の儒学者・雨森芳洲を顕彰する施設。お庭は、元保育園の園庭だった場所に整備された。戦国時代には、浅井氏の配下にあった雨森氏の居城だったところで、庭の奥の小高い部分は、当時の土塁がそのまま利用されている。

土塁のむこうに見える己高山を借景に、滝石組が豪快に組まれた枯山水。ゴツゴツした大石を滝の流れに見立てると、後ろの己高山がぐっと手前に引き寄せられ、その湧き水が庭に流れ込んでいるように見えてくる。流れ

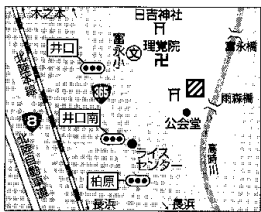


▲己高山を借景に、滝と枯山水が表現される

落ちた水は、静かな小川となって庭のなかを巡っていくように表現されている。

カギ型の広い濡れ縁は、ゆっくりお庭を鑑賞できるように作られている。ここに座って、抹茶を飲みながら繊細な砂紋の向こうに築山や石組などを見ていると、湖北の庭というより、京都の寺社に来たような錯覚を感じる。白砂が敷き詰められた手前の広い空間が大海原だとすれば、州浜の向こうに異国の世界が広がっている感じだ。

建物の東側に造られた庭は、日が傾くと、白い砂の上に影が伸びてきて、光と影が模様を描く。落ち葉の多い晩秋や積雪時など手入れがたいへんそうだが、「ただ鑑賞するだけでなく、イベントなどを開いて人が集う場にもしたい」と、館長の平井茂彦さん。「芳洲さんの人となりや表れ、建物にあざわしいものとして設計されたお庭です。芳洲さん飾り気のない、真面目で素朴な人だったと思いますよ」。雨森集落の散策時に立ち寄りたお庭だ。



【所在地】高月町雨森1166
 【連絡先】0749-85-5095
 【形態・様式】枯山水
 【作庭時期】昭和59年
 【作庭者】京都の造園業者
 【入館料】250円(20人以上の団体200円)中学生以下無料
 【開館時間】9:00~16:00 毎週月・火曜 祝日の翌日 年末年始(12/29~1/4)
 【休館日】

高野神社庭園

野趣ただよう昔むした石の庭

集落の突き当たり、山裾にある高野神社は、したたり落ちる水の音をも吸い取ってしまうような静けさに包まれている。池庭は、本殿に向かって右側、鐘突堂の石垣に連なるように造られている。

この庭は、大正時代、地元の若者たちが山から運び出した石を組んで造ったという。一見、乱雑に積み重ねられているようだが、南側に立てた石を

滝とし、傍には、自然石を組み合わせた山灯籠を配置。大ぶりの中島には自然石の橋を渡している。鳥の上には、ずんぐりとした亀が首をもたげている。

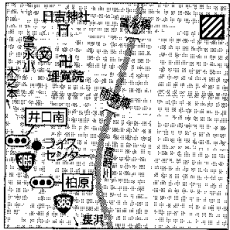
青く苔むした石組は、境内の静寂にふさわしい重々しさを感じさせる。それは、風雅というより、庭を造った若者たちの姿を彷彿させるような素朴で力強い表情でもある。(らん)



▲中島の上でこちらを見上げているようなのは、まさしく龜さん!



▲自然石を組み合わせた山灯籠



【所在地】伊香郡高月町高野1132
 【形態・様式】池泉回遊式
 【作庭時期】大正時代
 【作庭者】地元の若衆

全長寺庭園

行市山と田園に包まれた小ぶりの庭

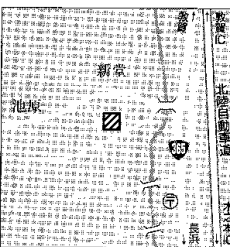
余呉湖から、まっすぐ伸びる国道365号を一路北へ。町役場のある中之郷を越え、新堂・池原という標識を左手に折れると、田んぼのなかに大きなお寺の屋根と樹木が現れる。全長寺は曹洞宗の中本山で、戦国時代末期に全長という僧によって建てられたという。庫裏の玄関口には、大きな石の布袋さんが満面の笑みを湛えて座っている。

本堂の左手にまわると、裏側に小ぢんまりとした庭が現れる。まわりは田んぼだから、いくらでも大きな庭が造れそうだが、小さな庭もいい。築山のイトヒバが天を突く巨木のようだし、小ぶりの石組も風景に納まって見える。速くに行市山系が連なり、まわりは広々とした田園風景。すべてが庭の景物だ。

すべてが庭の景物だ。(西)



▲築山の枯滝から池に注ぐ流れを表現。左手には小さな飛石が打たれている



【所在地】余呉町池原885
 【連絡先】0749-86-2001
 【形態・様式】池泉観賞式
 【作庭時期】江戸時代後期
 【作庭者】不詳